

中国の日本語教科書におけるコロケーションの 提示状況に関する一考察

－教科書間の比較を中心に－

李文平（名古屋大学大学院博士後期課程）

要 旨

本研究では、中国における日本語コロケーションの教育を改善するために、中国の大学一年、二年で最も広く使われている四種類の日本語教科書に見られるコロケーションを調べ、教科書間の比較を行った。今回の調査で明らかになったことは、第一に、各教科書が取り扱うコロケーションは頻度も種類も一致していないことから、中国の日本語教育においてコロケーションに関する統一的で明確な基準がないことが分かった。第二に、各教科書は程度の差こそあれ表現が古く、不適切なコロケーションを提示している傾向が見られた。第三に、各教科書はコロケーションの提示方法において主に暗示的な方法を取っていることが分かった。最後に、教科書の問題点を指摘した上で、今後の改善点及び各教科書が取り入れるべきコロケーションリストの提案を試みた。

キーワード：コロケーション 教科書コーパス コロケーション教育 第二言語習得

1. はじめに

学習者はしばしば「語感を育てる」のように、表現意図が分かり、文法的にも正しいが、母語話者なら用いないような不自然な表現をする。大曾（2005）は母語話者と学習者の違いはコロケーションの使用に現れると指摘している。Pawley and Syder（1983）はコロケーションを習得することは、母語話者レベルの流暢さや自然さに達するための最も重要な要因の一つであると主張し、コロケーションの重要性を指摘している。

コロケーションは日本語の「連語」の概念に近く、一般に「習慣的にまとまって使われる語の連鎖（大曾・滝沢2003）」を意味する。二つ以上の語の連鎖は、連結の固定度と意味の固定度によって三つの段階がある（国広1985, 2007）。最も強い語の連鎖は「腹を立てる」のように語の結びつきが固定的で全体の意味が個々の語の意味から解釈できない慣用句である。次の段階は「傘をさす」のように語と語の結びつきが固定的であるが、個々の構成要素から全体の意味が解釈できる語の連鎖であり、一般に「連語」や「コロケーション」と呼ばれる。最後に、結びつきが最もゆるい語の連

鎖は「花を買う」のような「自由結合」と呼ばれるもので、全体の意味が構成要素の総和であり、また「花」の代わりに「百合・バラ」などと自由に入れ替えられるものである。

外国語教育において、慣用句とコロケーションは慣用的な結びつきであり、学習者にとって予測が難しいため、重要視されている。一方、自由結合は個々の単語から意味が明らかになり、結びつきがゆるいもので、軽視される傾向がある。しかし、近年外国語教育では、コロケーションを幅広くとらえる必要があると指摘されている。阪田（1990）は外国人学習者の場合には語の連鎖の個々の構成要素の意味が必ずしも分かっていないと指摘しており、そして大曾（2005）は「風呂を沸かす」のような母語話者にとって常識的な表現の中に、学習者にとっては慣用的な表現もあると述べている。さらに、三好（2007）は「薬を飲む」のような自由結合に分類可能な結びつきは、学習者の母語の影響によって「薬を食べる」が正しいと考える可能性があるとして指摘している。本稿ではこのような指摘を踏まえ、日本語教育の立場から三好（2007）や大曾（2005）と同様に、自由結合もコロケーションとして扱うことにする。

コロケーションの中でも「名詞＋を＋動詞」パターンのコロケーションは一般語のコロケーションにおいて最も多く（秋元2002）、学習者にとって習得が難しい項目である（Nesselhauf 2005）。大曾・滝沢（2003）は日本語学習者コーパスからコロケーションの誤用例を抽出し、「×ビタミンを食べる」→「ビタミンをとる」、「×アルバイトをもっている」→「アルバイトをしている」などの誤用を紹介し、コロケーション習得の困難さを指摘している。

コロケーションは言語運用の流暢さや自然さの獲得において非常に重要で学習者にとって習得困難であるが、教師と学習者に見過ごされてしまう可能性が高い。コロケーションは個々の構成要素から全体の意味が解釈できるため、初めて出会った場合でも意味が分かることが多く、読解や聴解の過程で気づかれにくい。そして、従来、語を個別的・孤立的にとらえる傾向があり、教師や学習者の関心がコロケーションではなく、テキストに現れた個々の新出単語に向けられると指摘されている（三好2007）。コロケーションを意識していない学習者がインターネット上の検索ツールやコロケーションに関する副教材を利用し、コロケーション学習を行うことは考えにくい。コロケーション教育の現状を改善するために、教師側としてはコロケーションを意識して教える必要がある（国広2007）と同時に、学習者はコロケーションを意識して学習することが重要であると指摘されている（Woolard 2000）。その有効な方法の一つとしては、シラバスや教科書におけるコロケーションの提示方法を改善することが考えられる。

教室活動において教師と学習者に毎日使われる道具の一つが教科書であり、このような教科書はeラーニング教材や副教材に比べ、十分に使用されている点、そして定期的学習・継続的学習がしやすいという点において優れている。毎日使われている教

科書がコロケーションを明示的に提示し重視するならば、それを使う教師と学習者もコロケーションに関心を持つようになることが期待できる。また、石川（2008）は教科書が学習者の言語習得に与える影響はきわめて大きいと指摘している。したがって、中国で使われている日本語教科書に見られるコロケーションの分析を通して、適切でない提示を修正し、コロケーションの提示状況を改善することにより、学習者のコロケーション運用能力及び日本語運用能力の発達、そして学習者のコロケーションへの意識の高まり、さらに学習者の自主的学習の促進に重要な意義があると思われる。しかし、これまで中国の日本語教科書におけるコロケーションを中心に調査・分析する研究は行われてこなかった。

そこで本研究では、学習者にとって習得が難しい「名詞＋を＋動詞」パターンのコロケーションを対象に、中国におけるコロケーション教育を改善するために、中国の大学一年、二年で最も広く使われている教科書に見られるコロケーションを調べる。なお、コロケーションは初級段階に導入されると定着しやすく、中級段階でのコロケーション指導が非常に重要である（秋元1993）ため、大学一年、二年の教科書を対象に調査を行う。

2. 先行研究と研究課題

近年、日本語コロケーションに関する研究が増えてきているが、教科書におけるコロケーションを中心に調査した研究はまだ少なく、およそ20年前の研究であるが、秋元（1993）と秋元・有賀（1996）のみが先行研究として挙げられる。

秋元（1993）は連語を体系的・組織的に教える必要から、中級の教科書に出ている連語の数を調べるために、日本語教科書として広く使われている『日本語表現文型』（中級I、II）を調査した。その結果、教科書の本文と「語句」欄に載っている連語が約220項目あると述べている。秋元・有賀（1996）は初級、中級の日本語学習者に必要な連語を整理するために、5種類の初級日本語教科書に出ている連語をまとめた。しかし、秋元（1993）や秋元・有賀（1996）が調査した教科書は中国国内の日本語学習者に広く使用されているものではないため、中国の日本語コロケーション教育を改善するためには、中国で使われている教科書を調査する必要がある。

これまで中国の日本語教科書の調査に関して、本稿の調査と同じ「日本語教科書コーパスJTC第一版」（JTC）を用いた楊・陳（2009）と曹（2011）は、それぞれ授受動詞表現と複合動詞に関する調査を行ったが、JTCを利用してコロケーションに関する調査はまだ行われていない。その理由として、JTCに付いている検索エンジンがコロケーション抽出に向いておらず、自力でコロケーション検索を行うためにはコンピュータ操作・形態素解析・正規表現などに関するある程度の知識が必要になり（砂川2011）、加えてコロケーションの抽出作業はより複雑であるため、その調査が行われていないと考えられる。

そこで、本研究は中国におけるコロケーション教育を改善するために、中国の日本語学習者に最も広く使われている四種類の教科書に見られるコロケーションを調べ、以下の三つを研究課題として取り上げる。

- (1) コロケーションの頻度数と種類数において、四種類の教科書は一致しているか。
- (2) 提示しているコロケーションにおいて、中国の教科書と日本の教科書の相違点は何か。
- (3) コロケーションの提示方法において、教科書はどのような方法を取っているか。

3. 調査方法

3. 1. 使用するデータ

2006年北京日本学研究中心が開発した『日本語教科書コーパスJTC第一版』(JTC)¹⁾は中国の大学日本語専攻主幹科目「総合日本語(精読)」で使用されるものとして、教育部推薦教材と認定されたBD4冊、BW4冊、DW4冊とSW4冊を収録している(教科書の名称は公開されていないため、略称を使用した)。これらの教科書は日本語を勉強したことのない大学一年、二年の学習者を対象に、2年4学期にわたって使用されており、学習者の到達予想レベルが日本語能力試験N2以上とされている。また、これらの教科書は国家が決めた同一のシラバスのもとで編集された総合教科書(それぞれの収録語数は表1の総語数行を参照のこと)であるため、読み書きとコミュニケーションの指導においては大差がないとされている。なお、JTCに収録した教科書が中国国内の大学一年、二年で最も広く使われているものであり(曹2011)、中国の日本語学習者が使っている教科書の実態を反映できるため、本研究はJTCを使用する。

3. 2. データ処理手順

「名詞+を+動詞」パターンのコロケーションを以下の手順によって抽出した。

- (1) MeCab 0.994+UniDic 1.3.12で形態素解析を行う。
- (2) 語彙素とタグ情報のみ残し、ほかの情報を削除する。
- (3) (2)で得られたファイルの改行をスペースに置換してから、一行一文にする。
- (4) 一行に現れるすべての「名詞+を」と、その直後の「動詞」を抽出する。
- (5) 抽出した「名詞+を+動詞」パターンのフレーズの頻度表を作る。
- (6) (5)で得られたファイルの慣用句を削除する。
- (7) 練習問題の問題文のみ現れるフレーズ(例えば、「空欄を埋める」)を削除する。

本研究の目的は、中国の日本語教科書に見られるコロケーションを調査し、教科書間の比較を通して、中国におけるコロケーション教育を改善することである。抽出手順(4)に関して、大曾(2002)と同様に名詞の直後に現れる動詞に限定する理由は二つある。第一に、抽出精度が高いからである。コロケーションの抽出方法はまだ十

分に確立されていない（砂川2011）ため、技術上の制限により、抽出範囲が限られ、漏れが生じる可能性があるが、抽出精度は高くなる。一方、構文解析を利用すると、抽出範囲が広くなり、漏れは少なくなるが、解析の精度は80%～90%となり、エラーが多く含まれる可能性が高くなる。現行の教科書を客観的に評価するためには、より正しい表現を抽出する方法が望まれるため、本研究では抽出精度の高くなる抽出範囲を限定する方法を採用する。

第二に、現行の教科書に見られるコロケーションの提示状況を正確に把握するためである。「名詞+を」の後は直後に動詞が来る場合とそうでない場合がある。後者は「名詞+を+～+動詞」であり、「割る」、「染める」、「変える」などがこれにあたる。これらの動詞の場合、例えば、「八を二で割る」と「二で八を割る」、また「シャツを赤に染める」と「赤にシャツを染める」において、どちらも二番目の表現は間違いとはいえないものの、母語話者の言語習慣から見ると不自然な表現となる。それゆえ、「名詞+を+動詞」と「名詞+を+～+動詞」の差を無視してコロケーションの例を探すと、大量の例文が存在する場合、不自然な方の「(二で) 八を割る」、「(赤に) シャツを染める」のようなケースも正しいコロケーションとして認識されてしまい、改善すべき文を特定できなくなる可能性がある。以上の理由を以て、本稿では「名詞+を」の直後に現れる動詞に限定し、より正確な「名詞+を+動詞」のコロケーションを抽出し、より客観的に現行の教科書を評価することにする。

4. 結果と考察

4. 1. コロケーションの頻度数及び種類数における比較

コーパスにおける頻度数2以下のものは偶然的出現の可能性が疑われる（石川2008）ため、頻度数3以上のコロケーションについて分析を行う。各教科書のコロケーションの提示状況を見るために、四種類の教科書の総語数（形態素数）、及び3回以上出現したコロケーションのそれぞれの頻度数と種類数を表1にまとめる。

表1 各教科書における3回以上のコロケーションの概要

	BD		BW		DW		SW	
	頻度数	種類	頻度数	種類	頻度数	種類	頻度数	種類
総語数	297563	13070	365604	13671	246929	12017	334174	10610
3回以上のコロケーション	929	186	789	130	528	103	1244	216
総語数に対する比率	0.31%	1.42%	0.22%	0.95%	0.21%	0.86%	0.37%	2.04%

注：頻度数はトークン（延べ数）を意味し、種類はタイプ（異なり数）を意味している。

各教科書における3回以上のコロケーションの頻度数について、カイ二乗検定（独立性の検定）と多重比較を行った。カイ二乗検定の結果、四種類の教科書におけるコ

コロケーションの頻度数に差が認められた ($\chi^2 = 205.24, df = 3, p < .001$)。多重比較の結果、BWとDWの間を除き、BDとBW、BDとDW、BDとSW、BWとSW及びDWとSWの5組の教科書間に有意な差が見られた ($p < .001$)。つまり、BWとDWの二種類の教科書の場合には、コロケーションの頻度数に有意な差がないが、ほかの5組の教科書どうしにおいて、取り扱うコロケーションの頻度数に有意な差があり、教科書間に教えるべきコロケーションの頻度数に関して統一されていないといえる。

また、各教科書が扱っているコロケーションの種類に関して、SWが一番多く216種(2.04%)であり、次にBDは186種(1.42%)とBWは130種(0.95%)であり、DWが一番少なく103種(0.86%)である。四種類の教科書で共通しているコロケーションの数は14項目のみであり、任意の三種類の教科書で共通しているコロケーションの数も25項目にとどまる。このことから、教科書が独自の基準でコロケーションを選択し、教科書間では教授すべきコロケーションの種類においても統一的な基準がないことが分かる。

原因として、中国の日本語教育のシラバスである『高等院校日語專業基礎階段教学大綱』(2001)はコロケーションについて、「掌握少量常用詞組的用法。(p.4)(少量の常用フレーズを使いこなす。)」と記述するだけで、具体的にコロケーションの頻度数と種類数について説明をしていないため、各教科書の編集者が独自の基準でコロケーションを選択した可能性が考えられる。今後、シラバスや教科書の改訂にあたって、コロケーション調査に基づき、統一的で明確なコロケーション教育の基準を作ることには早急に取り組むべき課題の一つであると考えられる。

4. 2. 中国の教科書と日本の教科書における比較

中国で使われている日本語教科書と日本で使われている教科書において、取り扱われているコロケーションの違いを考察するために、秋元・有賀(1996)との比較を行った。なお、秋元(1993)はコロケーションの数を明確に述べているが、具体的なコロケーションについての記述がないため、比較を行えなかった。秋元・有賀(1996)にはコロケーションリストが付いているが、コロケーションの頻度数を載せていないため、秋元・有賀(1996)とコロケーションの種類のみを比較を行う。

4. 2. 1. 共通している項目

秋元・有賀(1996)に現れている「名詞+を+動詞」のコロケーションは全部で443種で、中国の各教科書と共通している項目の数を表2に示す。結果として、秋元・有賀と中国の各教科書で共通している項目の数が各教科書のコロケーションの種類に対して占める比率はいずれも27%以下にとどまる。このことから、中国の日本語教科書が取り扱うコロケーションは日本の日本語教科書との間に乖離があることが分かる。

表2 中国の日本語教科書と秋元・有賀（1996）で共通しているコロケーション

	BD	BW	DW	SW
教科書におけるコロケーションの種類数	186	130	103	216
秋元・有賀（1996）と共通している項目の数	32	35	21	42
種類数に対する比率	17.20%	26.92%	20.39%	19.44%

4. 2. 2. 類義コロケーションの比較

類義語のように、便宜上本稿では類義関係にあるコロケーションどうしのことを類義コロケーションと呼ぶ。中日の日本語教科書における類義コロケーションの比較は、中国の教科書の特徴や改善すべき点を特定するために有益であると考えられる。中日の日本語教科書において、類義コロケーションを表3と表4にまとめる。

表3 中国の教科書と秋元・有賀（1996）における類義コロケーション（1）

BD	秋元・有賀（1996）	BW	秋元・有賀（1996）
スライドを映す	スライドを使う	日記を書く	日記をつける
握手を交わす	握手をする	部屋を掃除する	部屋を片付ける
約束を違える	約束を破る	ワープロを使う	ワープロを打つ
質問を発する	質問をする	返事を出す	返事をする
		様子を窺う	様子を見る

表4 中国の教科書と秋元・有賀（1996）における類義コロケーション（2）

DW	秋元・有賀（1996）	SW	秋元・有賀（1996）
傘を持つ	傘をさす	傘を持つ	傘をさす
部屋を掃除する	部屋を片付ける	料理を作る	料理をする
		ワープロを使う	ワープロを打つ
		意見を出す	意見を述べる

類義コロケーションにおいて、学習者の産出を不自然にさせる恐れのある「スライドを映す」「握手を交わす」「約束を違える」と「傘を持つ」に焦点を当てて分析する。それぞれのコロケーションが教科書での例文は下の（1）から（5）までである。

- （1）教室で映画やスライドを映す時、回りに黒い幕をかけます。
- （2）男性同士、男女でも親しくない初対面の場合など、握手を交わす。
- （3）あるべき所に、あるべき生命が、約束をたがえず登場してくれるのは、やはりうれしい。
- （4）雨が降るかもしれないから、かさを持っていったほうがいいよ。
- （5）雨が降っているのに、傘を持たないで出かけました。

まず、「スライドを映す」は日本の教科書に取り上げられていない表現であり、日本語母語話者の客観的使用を代表した「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)にもない表現である。このことから、「スライドを映す」は日本語母語話者の言語使用の習慣を反映していないといえるだろう。BCCWJを調査した結果、例文(1)の文脈において、「スライドを映す」より「スライドを見(せ)る」の方がより母語話者の言語使用の習慣を反映している。また、前文脈の「映画や」がなければ、日本の教科書が提示している「スライドを使う」の方がよりよく使われている。しかし、中国の日本語教科書が「スライドを見(せ)る」や「スライドを使う」を提示していない中、「スライドを映す」を選んでいることは、中国語の「放映幻灯片」の影響を受けていると考えられる。例文(1)から見れば、「スライドを映す」は誤用であるとは言えないが、教科書が学習者の母語に類似しており、そして日本語母語話者の言語使用の習慣を反映していない表現を取り上げることは、学習者のコロケーション産出を「知らない表現があれば、母語によって推測すればいい」という誤った方向に導く可能性があるため、今後このような表現の取り扱いに注意する必要があると考えられる。

次に、例文(2)(3)から中国の教科書が提示している「握手を交わす」「約束を違える」は、日本の教科書が提示している「握手をする」「約束を破る」より古くて固い表現であることが分かる。教科書がこのような古くて固い表現を提示することにより、学習者がそれを運用し、産出している日本語が古めかしくてかたくなるしいというような印象を与えるため、今後学習にふさわしいコロケーションの導入が必要とされる。

最後に「傘を持つ」について、例文(4)と(5)は正しい文である。しかし、例文(5)は「雨が降っている」という文脈において、「傘をさしている」と「傘を持っている」とを学習者に混同させる恐れがある。この場合、教科書として「傘を持つ」と「傘をさす」を明確に区別する方がより適切だろう。秋元(1993)は中級段階の日本語学習者を対象にコロケーション能力調査を実施した結果、「傘をさす」の正答に対して誤答で最も多かったのが「傘を持つ」であり、これは「傘をさす」というコロケーションを知らないために、「物を持つ」の類推からの誤答とみられると指摘している。今回の調査では、このような誤用の原因として教科書の影響も可能性の一つとして考えられる。

4. 3. コロケーション提示方法における比較

各教科書はコロケーションの提示において、どのような方法を取っているかを考察するために、まず四種類の教科書で共通している「眼鏡をかける」を一例として、教科書でのコロケーションの提示方法を考察する。

(1) BD1 練習問題：(接続の練習)

(例) 山田さんは日本人です／スミスさんはアメリカ人です→山田さんは日本人で、スミスさんはアメリカ人です。

めがねをかけた人は王さんです／帽子をかぶった人は孫さんです→

(2) BW3 文法解説：(「と」の文法解説)

眼鏡を掛けないと、よく読めない。(不戴眼鏡看不清楚。)

(3) DW2 会話

酒井：ええ。背の高さは1メートル80ぐらいで痩せ型です。それから、眼鏡をかけています、黒ぶちの。

(4) SW3 文法解説：(動詞「かける」の使い方の説明)

目がますます悪くなって、もう眼鏡をかけないと、黒板の字が見えなくなりました。

以上の「眼鏡をかける」の提示方法を通して、例文(4)のSW3は動詞「かける」という語の使い方を説明するとき、「眼鏡をかける」というコロケーション項目に言及し、焦点を当てたため、明示的に教えているといえる。それ以外は、すべてほかの文法項目を説明・練習するとき、「眼鏡をかける」を題材として提示し、コロケーションに明示的な焦点を当てていないため、暗示的な方法を取っているということになる。各教科書において、明示的に提示しているコロケーションと暗示的に提示しているコロケーションを見るために、単語リスト(XC)、会話(KW)、練習問題(LX)、読文章(YD)と文法解説(ZS)に現れているコロケーションの頻度数を調べ、その数を表5に示す。

表5 コロケーションの出現部分のまとめ

	XC	KW	LX	YD	ZS	総頻度数	XCの割合
BD	24	222	374	48	261	929	2.58%
BW	11	142	426	∅	210	789	1.39%
DW	9	145	182	51	141	528	1.70%
SW	9	465	422	40	308	1244	0.72%

注：∅は教科書にない部分のことを意味している。

表5から分かるように、単語リストで明示的に提示するコロケーションの頻度数において、BDは24項目で最も多く、ほかの教科書は約10項目にとどまる。また単語リストに現れるコロケーションがコロケーションの総頻度数に対していずれも3%以下の割合であることから、単語リスト以外に現れる97%以上のコロケーションは会話、練習問題と文法解説の中で暗示的に提示されていることが推測できる。言語教育において、明示的提示と暗示的提示は共に必要なものであるが、母語話者によく使われている高頻度のものを明示的に指導すべきであり(Schmitt 2000)、このような指導が効果的であると多くの研究者が報告している(Woolard 2000; Hill 2000)。しかし、今回の調査では母語話者のよく使う²⁾「興味を持つ」「影響を与える」をはじめ、97%以上のコロケーションが教科書で暗示的に提示されていることが分かる。

これに対して、秋元・有賀（1996）は会話・読解に出ているコロケーションを太字で表示し、会話・読解の後、関連するコロケーションをまとめて提示し、最後にイラストなどを用いた様々な練習方法によって、コロケーションを復習する。このような方法により、学習者のコロケーションへの意識が高まり、そしてコロケーションの習得を促進させることが期待できる。今後、教科書の改訂にあたって、重要なコロケーションをこのように提示する方法も参考になる。

4. 4. 教科書の取り入れるべきコロケーションの提案

日本語教育において求められる教科書とは、母語話者の言語使用の習慣を反映し、学習者にふさわしい表現を提示するものとする。しかし、今回の調査で、教科書が提示しているコロケーションにおいて表現が古く、不適切なコロケーションも見られ、また、日本で使われている日本語教科書に現れているものを重視していない傾向も見られた。このような問題点に対し、今後不適切な表現を入れ替えるとともに、日本の教科書に現れている表現や母語話者のよく使う表現を取り入れる必要がある。ここでは、今後各教科書が取り入れるべきコロケーションの提案を試みる。

表6 取り入れるべきコロケーションの提案

BD	BW	DW	SW
皮を剥く	キーを押す	礼を言う	皮を剥く
キーを押す		皮を剥く	キーを押す
計画を立てる		キーを押す	計画を立てる
写真をとる		電話を切る	迷惑を掛ける
電話を切る		文句を言う	
ボタンを押す		様子を見る	

今回提案するものは、中国の教科書には現れていない項目であるが、秋元・有賀（1996）に現れ、そして母語話者のよく使うものに限る。その理由として、以下のものが挙げられる。秋元・有賀（1996）で扱われているコロケーションは、日本で使用されている日本語教科書に現れ、学習者の生活に近いトピックのもので、学習にふさわしいものであると考えられる。このようなコロケーションに、さらに母語話者のよく使うものという条件を加えると、母語話者の言語使用の習慣を反映できる。そのため、中国の日本語教科書を改訂する際に、このような項目を配慮に入れるべきであろう。具体的な項目を教科書別に表6に示す。今回提案したコロケーションの数が限られているため、今後、中国の日本語教科書に取り入れるべきコロケーションに関するさらなる研究が必要とされるだろう。

5. 結論

本研究では、中国の大学一年、二年で最も広く使われている四種類の日本語教科書に現れたコロケーションを調べ、教科書どうしの比較を通して、各教科書でのコロケーションの提示状況や問題点を明らかにすることができた。結果として、各教科書間において、取り扱うコロケーションの頻度も種類も統一されていないことが分かった。また、中国の各教科書が取り扱うコロケーションにおいて表現が古く、不適切なものが含まれている傾向が見られた。最後に、各教科書は母語話者のよく使うものを含め、97%以上のコロケーションを暗示的に提示し、重視していないことが分かった。

原因として、中国の日本語教育においてコロケーション教育を重要視していないことが考えられる。今後、シラバスや教科書の改訂にあたって、コロケーション調査に基づき、コロケーション教育の基準を作ることは早急に取り組むべき課題の一つであり、日本語教育におけるコロケーション学習の重要性を見直す必要がある。これは、中国の日本語教育の現状からの調査分析である。今後は、学習者が産出したコロケーションについて調査し、教科書が学習者のコロケーション産出に及ぼす影響に関する習得研究を進めていきたい。

注

- 1) JTCの問い合わせ先：「北京日本学研究中心 日本語教育研究室 中国100089北京市西三環北路2号 E-mail:syukeiei@gmail.com」。
- 2) 本稿では、BCCWJの上位100位の「名詞+を+動詞」パターンのコロケーションを母語話者のよく使うコロケーションとする。

参考文献

- 秋元美晴（1993）「語彙教育における連語指導の意義について」Proceedings of the 4th conference on second language research in Japan、29-47
- 秋元美晴・有賀千佳子（1996）『ペアで覚えるいろいろなことば—初・中級—学習者のための連語の整理』武蔵野書院
- 秋元美晴（2002）「連語の研究と語彙運用能力向上のためのその指導法」水谷修・李徳奉（編）『総合的日本語教育を求めて』国書刊行会、233-246
- 石川慎一郎（2008）『英語コーパスと言語教育』大修館書店
- 大曾美恵子（2002）「コーパスから得られるコロケーション情報—「影響、刺激、感動」を中心に—」『言語文化論集』23（2）、3-12
- 大曾美恵子・滝沢直宏（2003）「コーパスによる日本語教育の研究—コロケーション及びその誤用を中心に—」『日本語学』22巻4月臨時増刊号、234-244
- 大曾美恵子（2005）「コーパスによるコロケーションの特定—日本語学習辞書の充実を目指して—」影山太郎（編）『レキシコンフォーラム No.1』ひつじ書房、11-23

- 国広哲弥 (1985) 「慣用句論」『日本語学』4 (1)、4-14
- 国広哲弥 (2007) 「連語」飛田良文主幹『日本語学研究事典』明治書院、171-172
- 阪田雪子 (1990) 「連語・慣用句」玉村文郎 (編)『日本語の語彙・意味 (下)』明治書院、224-252
- 砂川有里子 (2011) 「日本語教育へのコーパスの活用に向けて」『日本語教育』150、4-18
- 三好裕子 (2007) 「連語による語彙指導の有効性の検討」『日本語教育』134、80-89
- 曹大峰 (2011) 「日語教材中の複合動詞及其教学方略研究」『日語学習与研究』154 (3)、9-14
- 教育部高等学校外語專業教学指導委員会日語組 (編) (2001) 『高等院校日語專業基礎階段教学大綱』大連理工大学出版社
- 楊秀娥・陳俊森 (2009) 「以學習者為中心的日語教材分析—試論授受表達在教材中处理方法—」『日語學習与研究』140 (1)、106-110
- Hill, Jimmie (2000), “Revising Priorities: from Grammatical Failure to Collocational Success,” Michael Lewis eds. *Teaching Collocation: Further Developments in the Lexical Approach*, Hove: Language Teaching Publications, 47-69.
- Nesselhauf, Nadja (2005), *Collocations in a Learner Corpus*, Amsterdam: John Benjamins.
- Pawley, Andrew and Frances Hodgetts Syder (1983), “Two Puzzles for Linguistic Theory: Nativelike Selection and Nativelike Fluency,” Jack C. Richards and Richard W. Schmidt eds. *Language and Communication*, London: Longman, 191-225.
- Schmitt, Norbert (2000), *Vocabulary in Language Teaching*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Woolard, George (2000), “Collocation-Encouraging Learner Independence,” Michael Lewis eds. *Teaching Collocation: Further Developments in the Lexical Approach*, Hove: Language Teaching Publications, 28-46.